日本中国学会次世代シンポジウム「中国学におけるテキストの諸問題」　2013.10.14　秋田大学

高唐台の雲と夢――古代文学にとってテキストとは何か

谷口　洋（奈良女子大学）

『文選』の宋玉賦：仕立て上げられた「作者」と「作品」

私の学生時代には、「古い文献はもう増えないのだから全部読め」と言われたものです。しかし今や、出土文献の奔流が押し寄せ、中国古代のテキストは激変のさなかにあります。ただこの点は、もっとふさわしい方にお願いして、私は、それとはまた違う次元で感じている、テキストの揺らぎや不安定さについて、宋玉を例に話してみたいと思います。

宋玉賦は、作者の問題がよく取りざたされますが、テキストとしてもいろいろ問題があります（ここで「宋玉賦」というのは、現行のテキストで宋玉の作ということになっている賦というほどの意味です）。「高唐賦」「神女賦」は、『文選』では二篇とされていますが、内容上は連続したものです。一方、それぞれの前半の宋玉と楚王の対話は、漢賦にみられる導入としての対話と異なり、それ自体賦としての結構を備えています。『文選』の二篇は、一篇とも四篇とも数えられるのです。試みに「高唐賦」「神女賦」を、篇題を省き、全く改行せずに（逆に句ごとに改行してもよい）書き写してみれば、篇の区切りが実は相対的なものでしかないことが実感できるでしょう。

宋玉賦については、作品中に作者宋玉自身が登場することがしばしば問題になりますが、『文選』は、「高唐賦」「神女賦」については、それぞれ宋玉と楚王の対話の部分を序として扱い、「惟高唐之大體兮」以下の独白部分こそを賦の本文としています。しかし、「高唐賦」「神女賦」を一連のものと考えれば、繰り返し現れる対話部分を序とよぶのは難しくなってしまいます。同じ『文選』所収の「風賦」は、宋玉が楚襄王に対し、「大王之雄風」と「庶人之雌風」について説くという趣向ですが、ここでは全体が一篇として扱われ、宋玉と王の対話も序とされてはいません。作品の内と外の境界も、また相対的なものなのです。

ちなみに「風賦」は、はじめに「楚襄王游於蘭臺之館、宋玉景差侍」とあるにもかかわらず、後に続くのは襄王と宋玉の対話であって、景差は全く登場しません。いま私たちが手にする宋玉賦のテキストは、どこかの段階で編集され、宋玉の「作品」として仕立て上げられた（それも不完全に）ものという感がぬぐえません。

第一の難問：そのテキストは誰のものか

こうしたことから、宋玉賦を六朝期の偽作とする見方もかつてはありましたが、あとでふれるように、少なくとも宋玉をめぐるテキストが漢代以前にあったことは確実ですから、その整理について劉向・劉歆にさかのぼって考えることは不当ではないでしょう。

劉向父子の校書事業は、既存の書物の校訂にとどまらない巨大な意義をもちます。六経のようにはじめから特別なテキストが存在した場合はともかく、諸子略や詩賦略においては、戦国後期以降テキストがたえず増殖し流動していた（その一部が、いままさに出土し

ているのでしょう）情況に、いったんくさびを打ち込んだのです。劉向による『晏子』『荀子』『荘子』『戦国策』などの叙録には、おびただしいテキストの洪水の中から、信頼するに足るものを選び出してゆく過程が述べられています。それらの多くはある人物の人と思想を語るものとして、その人物の名とともに伝えられたので、諸子略はおのずと主として人物別に編集されることになりました。

詩賦略にいう「宋玉賦十六篇」も、そのようにして選び出され、整えられ、特権化されたテキストだったのでしょう。そこにかぶせられた宋玉の名は、作者というより、むしろ諸子略と同様に、テキストとともに伝えられた名前というべきでしょう。ただ詩賦略は同時に、詩の衰退から賢人失志の賦が興ったと説き、荀卿・屈原から宋玉・唐勒を経て漢の賦家に至る「作者」の系譜をも述べています。劉向が詩賦略を諸子略と別にしたのは、ただ韻文だからというだけではなく、そこの独自の系譜を見ていたからなのです。

宋玉について現存する最初の伝記は、晋の習鑿歯『襄陽耆旧伝』にみえますが、その内容は、『韓詩外伝』『新序』所収の逸話と「高唐賦」の異伝をつきまぜたようなものです。ところが『文選』になると、「高唐賦」はもちろん、『新序』に収める別の逸話を、「対楚王問」の名で、宋玉の作品として収めています。つまり宋玉に関しては、同じようなテキストが使い回される間に、逸話が伝記に、さらには「作品」になっているのです。そこには、既に論じられているように、一介の宮廷文人から屈原を受け継ぐ辞賦文学の「作者」へという宋玉像の転換をみることができます。劉向の整理以降も、「作者」にふさわしいテキストを「発掘」し、「作品」として整備する営みは、ずっと続いていたのではないでしょうか。

漢魏六朝の文学研究は、別集がほとんど伝わらないため、『文選』『玉台新詠』などの総集や、さらに時代の下る唐代の類書に頼らざるを得ません。別集のあるものも、明代ころの編集を経ています。作品が生み出されてから、現行のテキストに至るまでには、気の遠くなるような年月と、無数の人々のかかわりがあったのです。ましてや、著者自身や近しい人々が別集を編む習慣がまだなかった漢代のものはなおさらであり、劉向以前ともなると、もはや混沌の彼方です。いま読んでいるテキストが誰のものかというのは、古い時代の文学を研究する者に常につきまとう、しかしほとんど回答不能な問いなのです。

第二の難問：そもそもテキストなんてあったのか

1972 年に山東省臨沂の銀雀山漢墓から出土した竹簡に、楚王の前で宋玉と唐勒が馬を御する術を論ずるという、宋玉賦に類するものが発見されました。これによって、とかく偽作との疑いがつきまとってきた宋玉賦も、先秦の真作であるとする論調が一気に力を得ることとなりました。しかし、銀雀山のテキストに宋玉の署名があるわけではないですし、テキストの全体像も不明で、それが賦であるのかどうかさえ見解は一致しません。

そもそも、それは果たしてどこまで本来の姿なのでしょうか。ここには少なからぬ仮借字が用いられており、もちろん字体は隷書であって、私たちが親しんでいる宋玉賦とはかなり異なる姿です。ただそれがほんとうに戦国楚の宋玉のものなら、本来は戦国楚文字と

楚の用字法によって書かれていたはずです。中国の古いテキストはみな、写本から刊本へという重大な変化を経ており、いままた、排印と標点、さらには電子テキスト化という大変革が起きつつありますが、秦による文字と用字法の統一には、それどころではない変化があったことになります。

しかし、問題はそうしたレベルにとどまりません。そもそも、賦が「歌わずして誦す」という口頭芸術であり、宋玉が伝承にいうような宮廷文人であったのなら、本来の宋玉賦とは、楚王に向けて演じられた一回性のパフォーマンスであったはずであり、そもそもオリジナルのテキストなど存在しなかったといわなければなりません。いま私たちが見る、宋玉その人を登場人物とするテキストは、そこからどれほど隔たっていることでしょう。

古代文学においては、歌謡や物語のように、何らかの点で口頭伝承とかかわりをもつものが研究対象の中心となるのですが、現代の私たちは、それをある時点からふり返って、その時代の目で書き直したテキストしか手にすることができないのです。

巫山の神女を夢に見る：中国的テキスト観を超えて

中国文明は古来営々とテキストを産み出し続け、節目ごとにテキストの大整理事業を行ってきました。増え続けるテキストを網羅した上で再整理する力業には、この世の知のすべてを視界に収め、我がものとしたいという強烈な欲求を感じます。大王朝が興起するたび正史や類書・叢書が編まれ、昨今も大型叢書が続々出ています。まこと中国こそはテキストの帝国であって、ヨーロッパ文明が弁論によって特徴づけられるのと対照的です。

一方で、同じように書かれたものを大切にしてきた日本との対比にも目を向けずにはおれません。日本人が、書かれたもの自体をありがたがり、大切に筆写し続けてきたのに対し、中国では、テキストは整理のたびに淘汰されてゆきます。中国人の関心と敬意は、むしろ、それらを著した作者の方に向かってきたようです。「述べて作らず」と言った孔子にとって、「作者」とはまさに聖人のことでした。個人の著述や創作がなされるようになっても、作者は特別な存在であり続けました。歴代の文献整理は、著述とその作者を目録に記し、テキストを確定することで、この観念を強化してきた面があります。今なお古代文学研究では作者の真偽が重大な関心事であり、銀雀山の断章でさえ例外ではありません。

私たちの研究の揺るぎなき基盤のように思えたテキストは、実はそれぞれの時代の古代観を投影しつつ、たえず流動しています。神聖なる「作者」の名の下にテキストを固定しようという企てさえ、校勘や修訂を通じて、テキストを流動させてきたのです。出土文献なども、単に既存の資料の誤りを正し欠を補うデータとしてでなく、テキストの流動性を示すものとみるべきでしょう。古代研究者は、姿を変え続けるとらえどころのないテキストに拠ってしか、古代を考えることができません。かといって不可知論にも陥らず、とらえどころのなさをそのままにとらえようとするうちに、古代は時におぼろげに姿を現すこともあるのでしょう。巫山の神女は、「旦に朝雲と為り、暮に行雨と為る」という変幻極まりないものだと、宋玉も言っているではありませんか。